別記様式第２号-1（第５条、第１０条、第１９条、第２４条関係）

学位論文の要旨	
氏　　名	王　振宇
学位論文題目	湘語蔡橋方言の研究

本論文は，中国湖南省邵陽県蔡橋郷の方言を記述したものである。蔡橋方言は中国の七大漢語方言の一つ，湘語に属する。湘語に関してはここ十数年，調査や記述が盛んに成されるようになった。ところが，これまでの研究対象は都市部の方言が中心であり，蔡橋郷など周辺地域における調査が殆ど行われていない。こういった現状のなか，筆者は２００７年８月～９月にかけて蔡橋郷でフィールドワークを行った。蔡橋方言の調査に際して，調査票を用いた調査のみならず，自然談話や民話、山歌などの録音をも行ってきた。その結果，３千以上の単字音、２千余りの基礎単語、3 百余りの調査例文を収集することができた。調査で集められた音声材料を文字化して添付資料を作成した。そして，これらの材料に基づいて蔡橋方言の体系的な記述を行った。

第１章では，蔡橋郷の概況、蔡橋方言の位置づけ、研究方法、論文の構成などについて論じている。

第２章では，蔡橋方言の音韻について論じている。

2.2 では，蔡橋方言の音韻体系と軽声変調を記述している。まず，単字音の音声構造を子音、母音、声調の３つの部分に分け，それぞれの部分に対する音韻論的な解釈を行っている。そして，単音節を超えた２字組のアクセント素を対象に，そこで起きた軽声変調について考察している。

2.3 では，歴史的な視点から，蔡橋方言の子音、母音、声調が中古音からそれぞれいかなる変化を成し遂げたかについて考察している。まず，蔡橋方言の子音については，中古全濁声母が殆ど有声音子音として現れることが一つ大きな特徴である。それは中古の声調と関係している。すなわち，平声・上声・去声の全濁声母は今日の蔡橋方言で有声音子音として現れるが，一方，入声の全濁声母は今日の蔡橋方言では殆ど有気音と無声音化されている。そして，中古の舌尖音が蔡橋方言で殆どそのまま保たれているため，狭母音の前では舌尖音と舌根音、舌尖音と舌面音の対立，いわゆる「尖音と団音の区分」が成り立っている。このように，蔡橋方言の子音には中古音の特徴が多く保たれている。そして，蔡

橋方言の母音については，複合母音の単母音化、低母音の高母音化、前舌母音の後舌化などの変化が起こり，中古音の母音に比べて大きな変貌を成し遂げた。これらの母音変化の中，介音による同化現象が多く見られる。たとえば，鼻音韻母は介音を持つ場合，今日蔡橋方言で殆ど狭母音となっているが，一方，介音を持たない場合，殆ど広母音のままで現れている。すなわち，*uɑn＞uN、*ian＞iN、*an＞aN（Nは鼻母音のことを表す）といったような変化である。最後に，蔡橋方言声調の変化について，次のような特徴を観察した。全濁上声は多くの漢語方言で去声など他の声調に合併されたが，蔡橋方言では合流せずに上声として現れるものも少なからず存在する。また，入声は蔡橋方言で独立の声調として存在しておらず，陰平、陰去、陽去に変じたことも特徴的である。

第３章では，蔡橋方言の文法について論じている。朱德熙（1982：40）の品詞分類に倣い，蔡橋方言の品詞を分類したうえで，対象をアスペクト助詞、およびヴォイスを表す前置詞に絞り，それぞれの意味用法について考察した。

3.2 では，文レベルのアスペクト的意味は動詞の語彙的意味とアスペクト助詞の意味の両方により決められるものであるという立場に立ち，まず，北京語のアスペクト助詞“了”、“着”と動詞類の関係を考察した。次に，蔡橋方言の動詞を分類したうえで，アスペクト助詞“刮”、“倒”、“起”との結合におけるアスペクト的意味のバリアントについてそれぞれ考察した。蔡橋方言のアスペクト助詞には次のような特徴があることがわかった。「動詞＋“刮”」が“得/不”を挿入して可能式を作ることができない特徴から，“刮”は結果補語より文法化が進んでいるアスペクト助詞である。一方，否定詞“没有”と共起できる点から，北京語のアスペクト助詞“了”に比べて文法化の度合いが低い。“倒”と“起”はいずれも持続を表すことができるが，“倒”は動作の持続と結果状態の持続の両方を表せるのに対して，“起”は結果状態の持続のみを表せる。そして，結果状態の持続を表す場合，“倒”は「“在”＋場所」のような前置詞句を構文に要求するが，一方，“起”はそれを必要としない。さらに，“倒”は動作の持続を表す場合，場所句の位置が動詞の前に置かれることもできれば，動詞の後ろに置かれることもできる。それに対して，結果状態の持続を表す場合，場所句は動詞句の後ろに置かねばならない。

3.3 では，蔡橋方言におけるヴォイスを表す前置詞について考察している。前置詞“担”、“把”“着”はいずれも動詞に由来するものであり，それぞれプロトタイプの意味用法を持つと同時に，意味の拡大を遂げている。たとえば，「手に取る、持つ」を意味する動詞から抽象化してきた前置詞“担”は処置文マーカーのみならず，受動文マーカーとしても働く。ただし，“担”が受動文マーカーとして働くことは無情物などの消極的な関与者が主語に立つ場合に限っており，積極的に動作行為を行い得る有情物主語の場合では受動文

を構成できない。そして，「与える」を意味する動詞に來源を持つ前置詞“把”は受益文マーカーをプロトタイプの用法としながら，処置文マーカーとしても使えるが，“担”に比べて使用範囲が狭く，動詞の直後に現われることができないなどの制限を受ける。

別記様式第７号（第１３条・２７条関係）

平成２２年２月１９日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　　王　振宇

学位論文題目

湘語蔡橋方言の研究

(Studies on the Cai-Qiao Xiang Dialect)

論文審査の概要

１．論文の狙いと概要

本論文は、中国湖南省邵陽県蔡橋郷の方言の音韻、文法、基礎語彙に関する記述である。蔡橋方言は中国の七大漢語方言の一つ、湘語に属する方言である。近年、中国では漢語諸方言に関する調査報告が盛んで、湘語の調査もかなり行われている。しかし、蔡橋郷のような周辺地域の言語に関しては、まだ調査がそれほど進んでいない。そのようななか、著者は蔡橋方言のフィールド調査を行い、約３千の単字音と約２千の基礎語彙、約３百の例文を収集し、データ集を作成している。そのデータに基づき、蔡橋方言の特徴をまとめたのが本論文である。

２．論文の構成

本論文の柱をなすのは、第２章「蔡橋方言の音韻」、第３章「蔡橋方言の文法」の２つの章、及び蔡橋方言に関する「同音字表」「基礎語彙」「文法例文」の３つのデータ集である。

「音韻」の章では、まず、蔡橋方言に現れる子音、母音、声調の種類を取り上げ、それらを整理することにより、蔡橋方言の音韻体系の構築を試みている。次に、歴史的な視点から、中国語中古音の枠組みに従って蔡橋方言の子音、母音、声調を整理し、対応表の形で提示することにより、蔡橋方言の特徴を説明しようとしている。

「文法」の章では、アスペクト表現とヴォイス表現の２つが取り上げられている。アスペクトでは、蔡橋方言の動詞を、工藤真由美（1995）の枠組みに従って、「主体動作・客体変化動詞」、「主体変化動詞」、「主体動作動詞」、「内的情態動詞」、「静態動詞」に分類した上で、各動詞と３つのアスペクト助詞「刮」「倒」「起」との接続関係を明らかにし、その表す意味について、次のような特徴を指摘している。まず、「刮」では、「主体動作・客体変化動詞＋刮」、「主体変化動詞＋刮」が＜動作・行為の完了＞を表すのに対し、「主体動作動詞＋刮」、「内的情態動詞＋刮」が＜動作の終了限界達成性＞を表す。「倒」では、「主体動作・客体変化動詞＋倒」が「場所句」の存在を条件として＜結果状態の持続＞を表すのに対し、「主体変化動詞＋倒」は「場所句」の位置により、＜動作持続＞または＜結果状態の持続＞を表す。また、「主体動作動詞＋倒」、「内的情態動詞＋倒」が＜動作持続＞を表す。「起」では、「主体動作・客体変化動詞＋起」、「主体変化動詞＋起」が＜結果状態の持続＞を、「主体動作動詞＋起」が＜動作の達成＞を表すのに対し、「内的情態動詞＋起」が＜開始限界達成性＞を表す。

ヴォイスについては、「担」「把」「着」の３語が取り上げられ、「担」は本来の動詞としての意味（手に取る、持つ）に加え、道具格や受動者、受損者を表すマーカーとして使用されること、「把」は本来の動詞としての意味（与える）に加え、受益者を表すマーカーとして使用されること、「着」は本来の動詞としての意味に加え、主体に対して結果状態を生じさせる者を表すマーカーとして使用されること等を明らかにしている。

３．論文の評価すべき点、および問題点と今後の課題

「音韻」の部分に関しては、当該方言の豊富なデータに基づいて考察がなされているものの、音韻論的処理のしかたに関して厳密さに欠ける部分がある。また、蔡橋方言の音の種類が過不足なく取り上げられているか、といった不安が残る。中古音との対応表に関しては、中国語音韻史に関する知識にやや欠けている感がある。ただし、蔡橋方言はこれまであまり調査報告がなかった方言であり、データとしての価値は高いと思われる。

「文法」の部分に関しては、やはり、記述に荒い部分や厳密性に欠ける部分があるものの、工藤真由美（1995）の枠組みを利用して蔡橋方言の動詞を分類し、動詞とアスペクト助詞との接続関係に焦点を当てて意味記述を行った点、また、ヴォイスマーカーと構文との関係を軸として詳細な分析を行った点等は評価できる。

基礎語彙に関しては、データとしては量がかなりそろっているが、詳細な論述がなかったのが惜しまれる。

全体を通して言えることだが、主たる研究対象は蔡橋方言だとしても、１地点のみの記

述では、考察内容に説得力を持たせることが難しい。それを補う方法として、近隣諸方言と比較するという方法が考えられる。序論によると、「邵陽県の各鎮、郷に赴き」とあるので、これら近隣の方言との比較を行いながら蔡橋方言の考察を行えば、もう少し考察の厚みが増し、論にも説得力が出たのではないかと思われる。これらの課題については、今後に期待したい。

4．総合評価

以上、諸々の課題は残るが、調査により独自の資料を作成し、それに基づき論文を作成した点は評価できる。よって、博士論文の基準を満たしていると判断する。

授与する博士学位　　学術

論文審査結果　　㊀・否

審査委員

主査　木部暢子　　副査　高津孝

副査　三木夏華　　副査　三輪伸春

副査　遠藤光暁

別記様式第８号（第１３条・２７条関係）

平成２２年２月１９日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長　殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻　氏名　　王　振宇

学位論文題目

湘語蔡橋方言の研究

(Studies on the Cai-Qiao Xiang Dialect)

最終試験の概要

学位（博士）論文に関する最終試験を平成２２年２月１６日に行い、下記５名の審査委員から問題についての質問と、申請者による応答を行った。

申請者の論文は、中国湖南省邵陽県蔡橋郷の方言の音韻、文法、基礎語彙に関する記述であるが、最終試験では、音韻、文法のそれぞれの項目につき、当該方言の具体的な言語形式や、論文中の厳密性を欠いた表現、説明不足の箇所等について質問がなされた。これらに対しては、一定の水準を満たす回答が得られた。

以上により、博士の学位を与えるに充分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位　　学術

最終試験結果　　㊀・否

審査委員

主査　木部暢子　　副査　[illegible]

副査　三木夏華　　副査　三輪伸春　印

副査　遠藤光暁